

【講演記録】

軍都豊橋と旧陸軍第 15 師団長官舎

愛知大学名誉教授、愛知大学東亜同文書院大学記念センターフェロー 藤田 佳久
(2015年6月28日 株式会社精文館書店豊橋本店)

1. はじめに

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました愛知大学名誉教授の藤田と申します。今回の『愛知大学公館 100 年物語』出版記念講演会については、愛知大学豊橋研究支援課と東亜同文書院大学記念センターのスタッフの方々にいろいろとサポートしていただきまして、開催するはこびとなりました。

今回の講演会は、『愛知大学公館 100 年物語』という、旧陸軍の第 15 師団長の官舎、のちに愛知大学の公館ですが、その歴史に関する話をまとめた本ができたのがきっかけとなりましたので、こちらの本をお読みいただければ大きな流れはお分かりいただけると思います。さきに私が話をしまして、あとで写真家の新村猛先生と愛知大学豊橋研究支援課の田辺課長のお二人が皆さんを誘惑するような公館の写真や映像をお見せいたします。

私の話は、はじめに師団長官舎、公館の話をさせていただきまして、次に、戦前、第 15 師団という軍隊が豊橋にやって来て、豊橋の町がそれに対応したのかを話します。これは今の時代で言いますと工場誘致のようなもので、例えば大きな工場がぼんと入ってきて、それに市民や市がどのように対応したのかに少し似ているところがあります。そこでそういう軍の 1 師団が 1 つの拠点を作ったことに対して、戦前の豊橋がどのように町づくりを行なったのか、現在もそこから学ぶべき点がないかどうか、というようなことを少しお話させていただきます。特に軍隊というきわめて内容の特定された組織であるということもありますけれど、今申しましたように大きな工場が来たのとある意味では非常によく似ています。そういう中で、どのように豊橋が対応したのかというようなことを中心に話をいたします。今日は時間限定で 60 分ということです。私はすぐ雑談に入ってしまうので、なるべく雑談は避けながら筋を追わせていただきます。せっかくですので我々が出版しました『愛知大学公館 100 年物語』という本も内容に沿って簡潔にお話をします (図 1)。

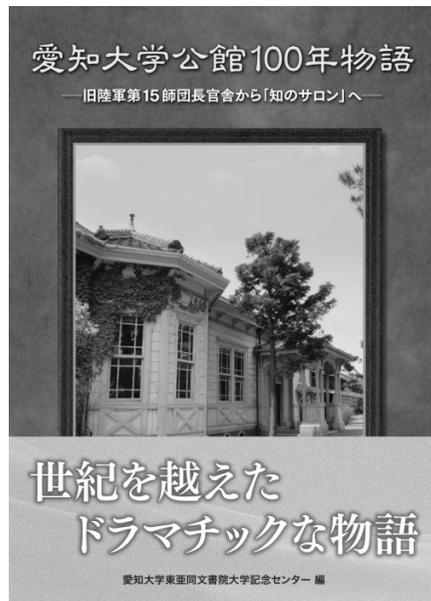


図1 『愛知大学公館100年物語』(愛知大学東亜同文書院大学記念センター編、2015年3月、あるむ刊)

2. 第 15 師団の立地と師団長官舎

それでは始めます。この建物が師団長官舎ですが、和洋館併設の構造となっています。皆さんのほうから向かって正面に見えるのが洋館です（図 2）。向こうのほうはちょっと見えませんが、接合している和館があります。第 15 師団が明治 41（1908）年に入ってきた時に、師団長官舎は花田町にまず作られ、明治 45（1912）年にここへオープンさせました。特徴的なのは、こういう建物を持つ師団が全国にいくつかあったということなんですね。

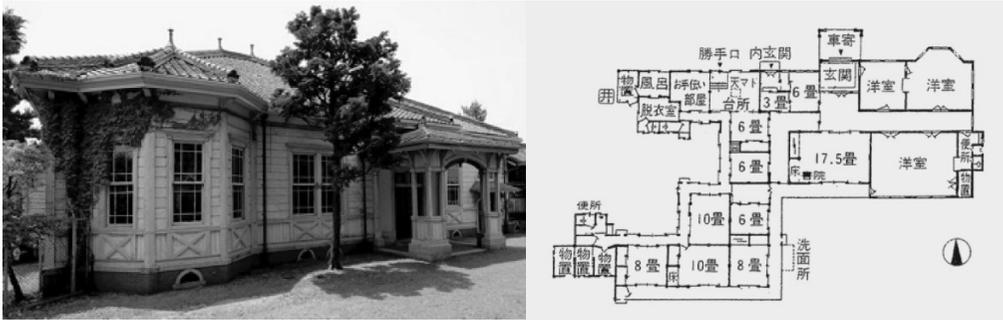


図2 愛知大学公館(左)と公館内部見取り図(図の上方右よりが玄関)

この第 15 師団の成立過程の背景としては、日露戦争の時に日本軍がどんどん当時の満州へ出かけて行ったため、内地が手薄になってしまったということが挙げられます。それで、その手薄な部分をカバーしながら大陸のほうへも出かけるといった、いくつかの師団ができたのです。師団というのは大体 1 万人単位ですね。1 万人いれば戦争をする場合、何でもできる組織なんです。歩兵から砲弾を撃つチームから、騎兵隊まで。豊橋に来た第 15 師団は、騎兵隊がかなり大きな力を持ったんですけど、航空隊も、そして後方支援も含めた荷車での運搬組織の輜重兵(しちょうへい)までありました。「し」っていうのは車へんに留学するときの留という字に近いですね。彼らは重たい荷物を後ろのほうで一生懸命運搬するという役割ですね。そういうような、いわゆるワンセットで 1 つの戦争の対応をするという組織です。これが 1 師団。それがどかっと豊橋へ来たのです。

何故来たかと言うと、その日露戦争の後半、もう終わりかけた頃に、前にふれましたように大陸へ援軍に行くわけです。けれどほとんど戦争は終わっておりました。だから方向を変えて朝鮮の平壤と北朝鮮一帯へ巡り、そこでの整理、管理の役を仰せつかって行動していたわけです。そして戦争後、日本へ帰って来て、千葉県、習志野、のほうに滞在したわけですが、やはりそれまでの経験をふまえて全国に 3 つぐらい師団を増やしたほうがいいんじゃないかということになり、そのうちの現地へ行っていた第 15 師団に関しては東海地方に設けようということが決まったわけです。

そこで東海地方に第 15 師団を立地させるということが決まったので、沼津、静岡、浜松、豊橋、岐阜などから猛烈な誘致合戦が起こったわけです。今で言うと大工場誘致合戦と同じ状況です。結果的に豊橋に決まったんですけど、その理由についていろんなことが言われていますが、大きな理由は高師と天伯に大演習場の適地があって、それが大陸とよく似ているという意味で演習地としては非常に優れてるんじゃないかということと、豊橋が東京と大阪の中間にあり、東海地方の中で言いますと、色んな意味で交通の便も含めて国益

にもなり、広がりにもなるということで決まったんじゃないかなと思うんですね。そこで明治 41 (1908) 年、豊橋に第 15 師団が立地してきたわけです。

このような経緯でしたので、豊橋へ来るまでに師団長が何人かいたわけですね。これが歴代の師団長の一覧です (図 3)。その中で特に話題になったのが久邇宮で、皇族が初めて師団長として豊橋へやってきたのです。市民はびっくり仰天したんです。皇族が赴任してきた時には、市民は一目見ようと道路は歓迎する市民で埋め尽くされました。昔のメインストリートは呉服町の方にあり、駅は離れた所にできましたから、この道路は駅と中心部

氏名 (いずれも中程)	在任期間	備考
内山小二郎	1909 (明治 42 年) .1.14 ~ 1912.11.27	在任中に官舎竣工
井口省吾	1912 (大正元年) .11.27 ~ 1915.1.25	
由比光衛	1915 (大正 4 年) .1.25 ~ 1917.8.6	
久邇宮邦彦王	1917 (大正 6 年) .8.6 ~ 1918.8.9	
尾野実信	1918 (大正 7 年) .8.9 ~ 1919.11.25	
市川堅太郎	1919 (大正 8 年) .11.25 ~ 1922.8.15	
田中国重	1922 (大正 11 年) .8.15 ~ 1925.5.1 (廃止)	

・第 15 師団の豊橋進駐前および、師団長官舎竣工前の師団長は省略。

図 3 第 15 師団期(1912~25)の歴代師団長

の呉服町や魚町、札木の方へ行く、斜めの道が駅前通りとして開発されました。今、松葉公園へ行く手前のところに額 (ぬか) ビル (額田銀行ビル) と言っていた昔のビルの跡に、カリオンビルがありますね。あの前は道が斜めに通っていますね。あれが昔の中心部と駅を結ぶ道路の名残りなんですね。そして、町の中をぐるっと一周して第 15 師団のある高師へ行くわけですけど、久邇宮が豊橋に赴任した時にはこのように大騒ぎになったわけです。これは久邇宮一家の写真ですね。約 1 年間豊橋に滞在されるわけですけど、その娘さんが良子さんです (図 4)。良し悪しの良という字を書いて名前を「ながこ」と言いますね。その良子さんがここにおられた 1 年間の後半、年が明けてからなんですけど、今は亡き昭和天皇の妃として内定するというビッグニュースがあったんです。当時 14 歳の娘さんでした。今で言ったら週刊誌で大フィーバーすると思いますね。当時、豊橋には 4 つほど新聞がありましたけど、それらの新聞各紙とも連日そのニュースで埋まります。そしていろいろ記録が残されています。この良子さんに関しましては現在もそうですけど、豊橋に住まれ、学校に通っていたという、いわゆる都市伝説が豊橋に残っているわけです。どんな都市伝説でしょうか。皆さんも多少頭の中にある人がいらっしゃるかと思いますけど、その都市伝説が本当なのかとってて解明してくれたのが今パワーポイントを操作していただいている森さんです。ここでちょっと森さんの話を聞いていただきましょう。

3. 良子様をめぐる都市伝説

森 東亜同文書院大学記念センターの森と申します。先ほど先生が解明したとおっしゃられた都市伝説について、私の方で当時発刊していた 4 紙の新聞記事を辿れば良子さんが豊橋にいたという、その実態を解明できるのではないかと思います、調べました。具体的には、

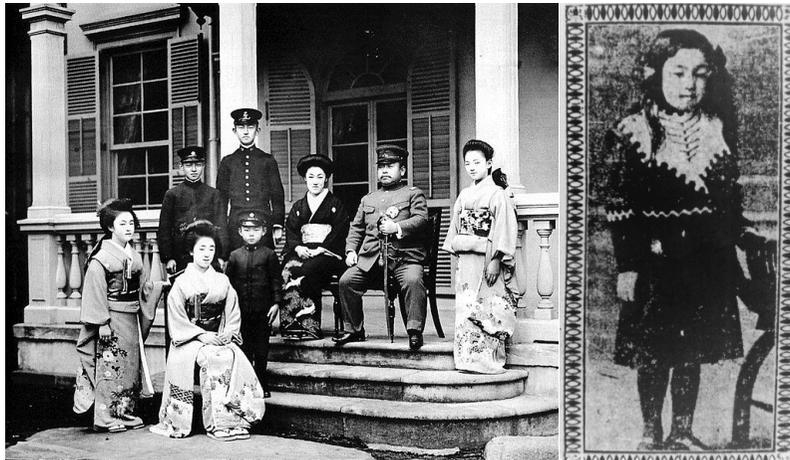


図4 久瀬宮一家(左)と良子様(右)

久瀬宮の邦彦様がいらっしゃった1年間の4紙の新聞記事を全部調べました。結果として、師団長の久瀬宮様が豊橋へ単身赴任し、良子さんは学習院で勉強されていたということで、実際に豊橋に来たのは冬休みの6日間(大正6(1917)年12月23日から28日)と、結婚が決まってからの(大正7(1918)年)3月2日から4月2日までの1か月間、その期間豊橋におられたことがわかりました。ちなみにこの写真(図4)なんですけど、豊橋の『新愛知』という新聞にて当時結婚の内定が決まったという報道の際に使用されたものです。ご存知の方がいらっしゃると思うんですが、『新愛知』は今の『中日新聞』の前身です。1月19日に掲載された記事で使われた写真です。内定が決まったのが1月18日ですので、その翌日になりますね。市内はフィーバーになったと思います。そのフィーバーぶりは全国紙にも紹介されて豊橋でも4紙の中の2紙は1週間かけて連載記事で掲載されるというように盛り上がっていました。

藤田 もう少し具体的な都市伝説を言いますと、良子さんは当時、豊橋の豊橋高女におられたと。今の豊橋東高校の方々是我が高等学校におられたんだ。いや、もう1つ高等女学校もありましたね。それは豊川の今の国府にある国府高等女学校。いや、我々のほうにおられたのだと。そういう伝説がずっと広まってきたわけですね。ですから、森さんにはその辺も含めてその伝説が事実どうだったかということを吟味したわけですが、今のお話の通りなんです。ちょっとロマンが消えてしまったというところもあるんですけども。しかし、1か月間おられたうちに名古屋へ行ったり、この辺いっぱいあちこち見て回っているんですよ。だからお妃候補の生涯は豊橋で始まったんですね。というわけで、こういう大きな出来事もあったのです。

そういう第15師団ですけれど、第一次大戦後の世界的な軍縮の動きとともに景気も悪くなっていきます。日本もそうです。お金がなくなるということで世界の先進国と日本を合わせて軍縮、いわゆる宇垣陸軍代理の時の宇垣軍縮というような時代になったわけです。それによってこの第15師団は廃止されてしまったのです。廃止後、豊橋ではどうしようかということになるわけですが、この話はまた後のほうでいたします。

4. 東亜同文書院から愛知大学の開設、そして愛知大学公館へ

その後ここには陸軍の教導学校、次いで陸軍予備士官学校が入るのですが、太平洋戦争での敗戦後、かつて第15師団が使っていた司令部のあった本部の敷地に中国の上海にあった東亜同文書院大学の関係者が引揚げてきたのです。そこで少し、愛大の前身である東亜同文書院大学の豊橋の立地についてごく簡単にお話します。これは上海にあった時の建物



図5 上海にあった東亜同文書院大学の本館

ですけれど、これは正面ですね（図5）。後にはこの前面を木がいっぱい成長して覆うようになり、なかなか建物の全貌が見えなくなりますが、その最初の頃の写真です。私どもセンターの研究員に高木（秀和）君というのがいて、彼が一生懸命インターネットで探して、当時の校舎の写真を手に入れましたので、ここで紹介させていただきます。

中国内戦とのちの日中戦争で影響を受け、校舎が使えなくなったりしたため、これは書院の最盛期となった3度目の校舎の姿です。敗戦の年となった昭和20（1945）年には東シナ海が渡れなくなったため、最後の入学生は上海に行けなかったんですね。その際、呉羽紡績の社長の好意もあって富山の呉羽キャンパスで勉強したのです。そして、終戦を迎えていよいよ閉校という時に、日中関係のためにこれだけ業績をあげた学校はないからというわけで、呉羽の斎伯分校長が政府に書院の継続の申請を出したんです。そしたら東亜同文書院大学の存続を認めるという通知が当時の外務大臣の吉田茂から来ました。ですから書院は戦後呉羽で再開したのです。ところが東亜同文書院の経営母体は東亜同文会であり、戦時中の総理大臣の近衛文麿がその会長をしていたんですが、この方は東京裁判の時、巣鴨出廷の前の日に自殺してしまわれた方です。そのために書院の経営母体の東亜同文会はGHQによって潰されてしまったんです。

おかげでせっかく復活した東亜同文書院大学は1945年の終戦の後、秋口にまた学校を始めたんですけど、数か月でまた閉校になってしまったのです。上海にいた書院本部の本間先生はすぐ代わりの土地を求めて学校設立の準備をせよということを呉羽の先生たちに伝えました。それで、呉羽校舎の中に西三河の高浜の出身の神谷（龍男）という先生がおられて一生懸命土地を探した結果、全国の多くの都市では戦時中に多くの建物が空襲で焼かれてしまいましたが、豊橋の南郊で第15師団があった一帯は無傷であっ



図6 愛知大学豊橋キャンパスでの本間先生（左）と小岩井先生（右）

た。豊橋の南郊で第15師団があった一帯は無傷であっ

たというわけで、この建物を獲得しようとする諸団体の競争が激しかった中、確保したのですね。それで豊橋に愛知大学校を創ることができたのです。

東亜同文書院大学という名前は中国に関係しているというわけで戦後、GHQ が認めませんでした。そこで「知を愛する」という名前は最高ではないかということで、愛知大学という名前となりました。ちなみに上智大学の学長が愛知大学を訪問してきた時、「名前では絶対負けます。上智より愛知のほうが遥かに上だ」と言われたという話が伝わっております。そういう「知を愛する」という意味の愛知大学というわけで、本間先生や神谷先生が命名されたということです。こちらが本間先生と同じく愛知大学の学長にもなった小岩井先生です。お二人がそろっている写真(図6)としては本学で唯一のものだそうで、学内ではどこでもこの写真が出てまいります。

しかし、そのあとすぐの昭和 25 (1950) 年、警察予備隊ができた頃、GHQ より警察予備隊の幹部用宿舎に使うからこの愛知大学公館(旧師団長官舎)から出ていけという公館
接收通知がきたのです。本間先生がそれに対して、我々は今理想的な学園を創りつつあり、
教員だけじゃなくて学生とのゼミや交流の場に使用していると回答したのですね。実際に



図7 公館での本間先生一家

こういう学生との懇談、ゼミ授業などいろいろ使用されていたんですね。こういうことはイギリスのオクスフォード、ケンブリッジも同様で、学習の場と生活の場が一緒になったキャンパスになっているんですね。これはこの公館での本間先生がご家族の方々の写真です(図7)。



図8 公館での学生との懇談(左)や愛大教職員奥様方の会合(右)

これは小岩井先生の奥さんの多嘉子さんが学生や先生方の奥さんを集めての会合をしたときの写真です(図8)。そういう中で GHQ も諦め、接收を免れたんです。

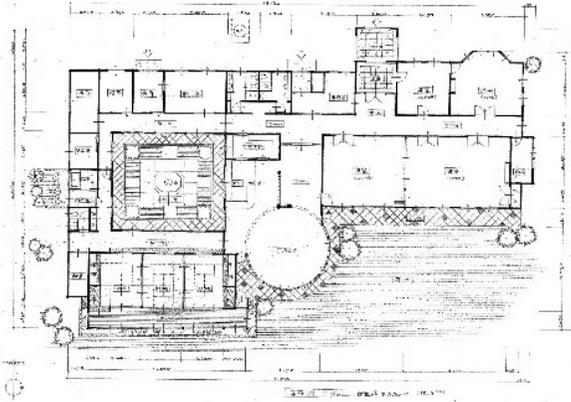


図9 迎賓館構想の建物改築改装図



図10 山口恵里子氏が描いた公館の入選作品

これが今の愛知大学、これが元々の正門と副門です(図11)。この正門奥の左手に師団司令部がありました。今は木陰に隠れております。

一方、渥美線の電車から降りてすぐの副門を入ったところにあるロータリーは昔のままです。この南のほうに南部中学とか、栄小学校もありますね。あちらのほうも旧訓練場です。道路の反対側には今は時習館高校。ここは旧航空隊でした。これは現在、「愛知大学前」駅ですけど、この北側には当時師団用の駅がありました。戦後無くなってしまったんですけど、ずっと後になって今の愛大前の駅ができたのです。将校クラブが今は研究所棟の建物としてこういうふうに残っています。なかなか立派な建物です(図12)。



図11 現在の愛知大学の正門(左)と駅隣の副門(右)

そうしているうちに、少しずつ市内の建物が充実していきまして、公館の利用度が減っていきました。そしてのち、愛知万博の時には豊橋の経済界が中心になり、その時のリーダーでした武蔵精密の社長さんがここに3億円寄付し、迎賓館をつくと提案されたのです(図9)。皆大喜びしたんですが、その直後に東京へ出張に行かれてホテルで亡くなってしまったのです。ですから結局その話がうやむやになってしまいました。豊橋駅の西に武蔵精密という看板を見るたびに惜しいことしたなと思っています。

これは老朽化した公館の建物を、本学事務職の山口恵里子さんが描いた絵です(図10)。公館の絵を描き続け、一水会ではすでに連続5回目の入選をしております。その山口さんが今日皆さん方に受付で絵葉書を1枚ずつ差し上げるといって持って来られました。もらってない方は受付でもらってください。



図12 旧将校クラブは以前の総合郷土研究所と中部産業研究所棟として使われていた

私もかつてこの研究所の所長を務めていた頃に天井へ上ったりして木材の柱をみたことがあります。今でも新しい状態なんですね。建物が木造だからとやって来る建築診断の人は、「これはすぐ壊れます」なんて言うんですけど、そんなことはないんです。三河地震、東南海地震みんな耐えてきたんですね。柱がいっぱいあるし、壁も多く、壁工法の建物ですね。そう簡単には倒れないという診断を私自身はして

います。ここは本館の手前で、ここに銀行のATMがあります。ここに戦争末期の豊川海軍工廠の爆撃の帰路に、米軍が一発大きな弾を落とし、大きな穴ができ、池になったのです。これが師団本部ですね（図13）。昔の師団のいろんな建物がこういうかたちで後世に残っております。



図13 現在の愛知大学キャンパス内。右下が旧師団司令部棟で、ここに愛知大学東亜同文書院大学記念センターと展示室がある。また右上の写真中の手前のATMボックスのあるあたりが池になった

ぜひ皆さん方も愛大、大学に入るには敷居が高いっておっしゃいますけど、決して敷居は高くないです。ただ、足をふんばれば入れますから。ぜひいらしていただきたいですね。なお、ついでに皇太子が婚約の後、数年後に豊橋での大演習の視察に来られます。その時

の記念樹がこれです(図14)。残念ながら一代目は終わってしまったんですけど、二代目です。同じく久邇宮も来られ、植樹されたんですね。これは本物。土地の悪い条件の中でよくこんなに大きく育っているなと思います(図14)。



図14 裕仁親王(左)と久邇宮(右)の記念植樹の碑

5. 豊橋の町の成立とあゆみ

それでは、本題に入ります。まず、今のような第15師団が豊橋へ入って来るまでの町の経過というのは一体どんなであったかということであります。

まずは吉田の町、つまり豊橋の出来方ですね。豊橋は中世の時代は今橋と言いました。今橋という意味はモダンブリッジですね。「現代橋」っていうような感じですかね。おそらく最初は船を並べて上に板を張って渡っていたと思うんです。それが江戸時代に入りますと名前を吉田に変えて、そして明治に入ると豊橋と変わります。中国では政権が変わると地名が変わる例はいっぱいあるんですけど、日本では珍しいですね。なぜ吉田にお城ができたのでしょうか。これは豊川の流れの変化によるものです。細かい話すると、これだけでまた1時間ぐらいかかってしまうので、ごく簡単に言いましょ。これが豊川の荒れ川ですね。上流が固い岩盤なので降った雨がみんなどかかと流れてきて下流で洪水を起こすんです。堤防を連続せずに切って霞堤とし、遊水地を多くつくったのです。牧野(古白)氏は最初この豊川の沖積低地に中世の終わり頃に居城をつくりました。おそらくこの豊川交通路の中で税金を取れる最高の場所だったのでしょけど、氾濫が相次いだこと、また明応年間の大地震が、私のこれは現地観察ですけど、この居城一帯を少し隆起させた。牧野氏の居城を発掘すると、土塁があって、お城があって、この西側に豊川(とよがわ)が流れていたんですね。今で言うと松原用水沿いの流路ですね。ところが、その後、その地震があって、おそらくここは隆起した。すると豊川の流れはそっちにいかなくなりました。そこで牧野氏は思い切って城を段丘上の牛久保へ移転した。ところが、豊川の流れが反対

側である左岸側へ流れて変えたということはどういうことかという、牛久保は豊川の流
れとは関係がなくなったわけです。豊川は左岸側に流れてきて、今の朝倉川との合流点付
近へどかんとぶつかる。ここは一番都合のいい防御地点になりますね。しかも少し高いか
ら豊川の下流域一帯を見渡せるというわけでここへ移転して新しく今橋城を築いた(図 15)。

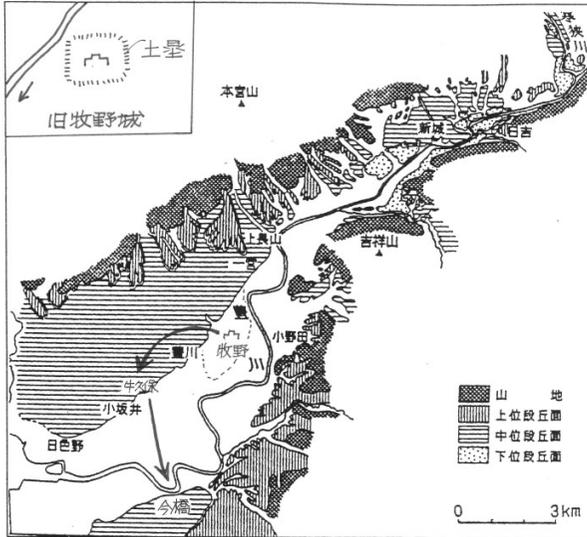


図15 牧野氏の居城地点の移転図

江戸時代に入ると吉田の地名へ
改称し、吉田城になり、牧野氏か
ら今川方、さらに徳川家へと移っ
ていきます。それが吉田、今の豊
橋の原型であるわけです。明応の
大地震の時に豊川の瀬替えが起
こったと記録に残っています。だ
から、この瀬替えが豊川の流路を
変えて、豊川を今の流路に変えた
のです。これを防御の拠点として
築城したのです。そういう点では
牧野氏は非常に土地条件をうまく
考えた領主だったのではないかな
と思います。

ところで、江戸時代に入ると、
尾張藩は徳川家の息子が配置され、

ほぼ一国支配になります。三河のほうは徳川家康の下で功績のあった家臣連中に 3 万石だ
とか、5 万石だとか少しずつ分けました。吉田藩には 7 万石前後が多かったのですが、最高
の時は 15 万石の領地を分け与えられたこともあります。このような分け方で三河側には分
散的な所領関係をもたらしました。これはこれで大変面白いですね。例えば吉田藩の人は、
三河の国の中で他の藩やその他の土地がどうなっているか分からない。そこで、徳川の平
和な時代になると住民の中から自分たちで歩き回って三河全体の地誌を作る動きが活発化
します。自分たちの手で民間地誌を作ったのです。その地誌の多さは全国でもピカイチで
す。そういう中で三河の色々な情報を得た。中でも秋田県にまで行ってしまった菅江真澄
みたいな人もおられますね。そういうような好奇心旺盛な三河人の状況があったのです。

これは江戸時代の吉田の町です(図 16)。これが東海道で東からこう入ってきますと、町
の入口の木戸を通して中心部の札木へ入ってきます。通りだけ広く書いてあります。札木
からさらに西へ行きますと、上传馬。この辺がいわゆる「吉田通れば二階から招く」とい
う花街でもありました。この伝統は明治に入ってから続きます。札木の一角から上传馬
ですね。ここからまた西側に出口の木戸の門があって、宿と城下の町の外へ出て豊橋(と
よばし)という橋で豊川を渡ります。

豊橋と浜松の江戸時代の人口を比較しますと、吉田がだいたい 1000 軒ぐらい。浜松は
1600 軒ぐらいで推移しています(図 17)。似たような町の規模です。吉田の最後に入って
きたお役人が伊予(愛媛)に吉田っていう町があって、ややこしいからせつかくここに
いい橋があるからこの名前にしたらどうだっていうわけで「豊橋」になりました。この豊橋
は大正 9 (1920) 年に建て替えて初めて鉄橋になったんですね(図 18)。

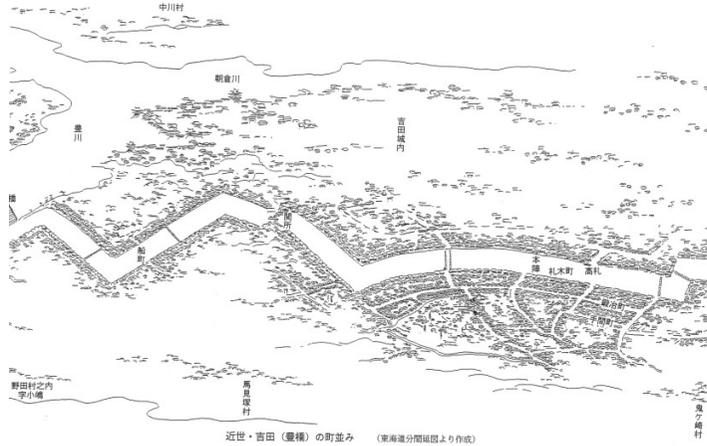


図16 江戸時代の吉田の町。中央の東海道沿いが大きく描かれている

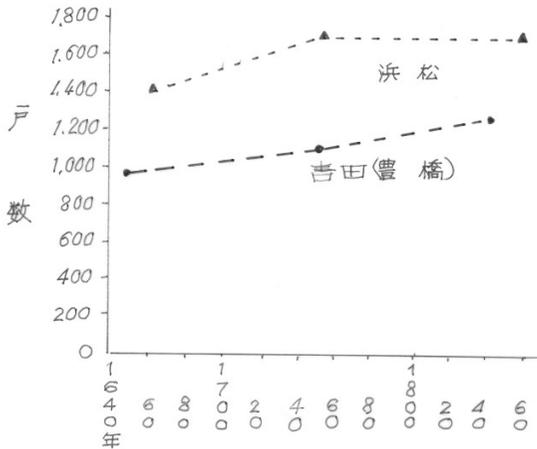


図17 江戸時代における豊橋と浜松の戸数変化

明治の10年代になると、名古屋から18連隊が分割して豊橋にやってきます。このとき吉田城へ入るんですね。これが当時の吉田城、こっちは武家屋敷(図19)。この辺一体が全部18連隊の用地になりました。ここから軍隊の町が始まっていきます。この吉田城は天守閣を作る前に城主池田輝政が姫路城へ転封されて行ってしまいました。もう少し長くいたら姫路城のあんな大きくはないかもしれないけど、もう少し小ぶりで立派なお城ができたんじゃないかと思っていて、それが少し残念ですが、三重の濠だけはしっかり作ってありますね。

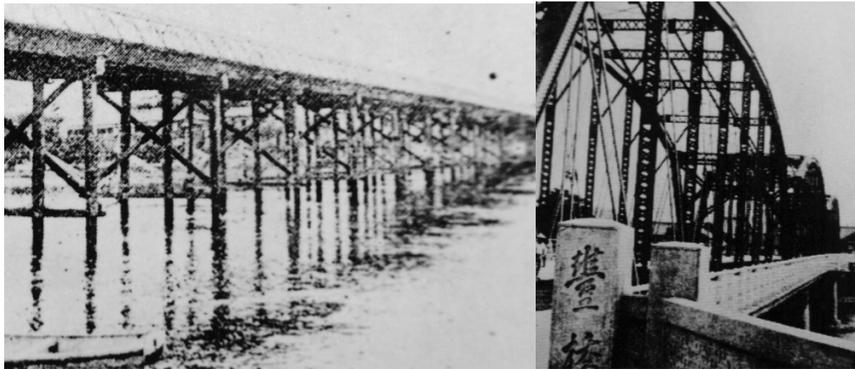


図18 豊橋(とよばし)の変化

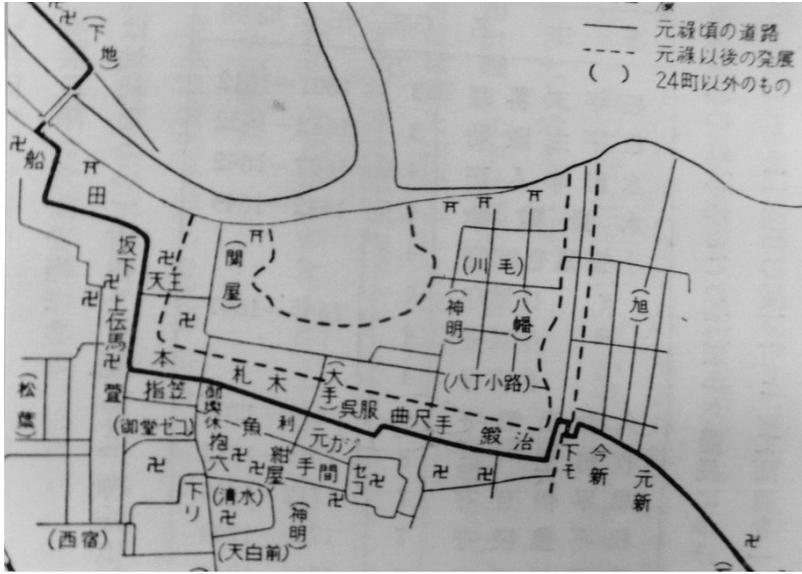


図19 吉田城下図。太い黒線が東海道。上方左の湾曲部が豊川の流れ

これが正面の門と大手門です(図20)。大手門の南は田原街道へつながります。上から見ると、戦争中の空襲にも遭わず、こんなかたちで18連隊の建物が残っているわけです(図21)。私は戦後の中学校時代にはこの連隊の建物が校舎でした。この辺の校舎で授業を受けていました。南側は朝鮮の方の学校に利用されていました。

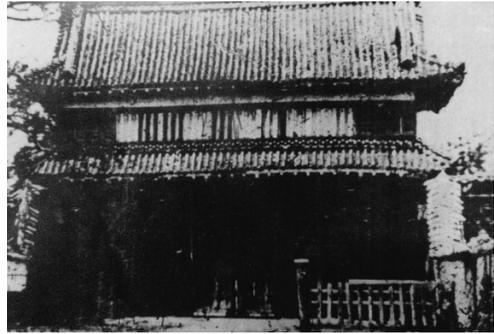
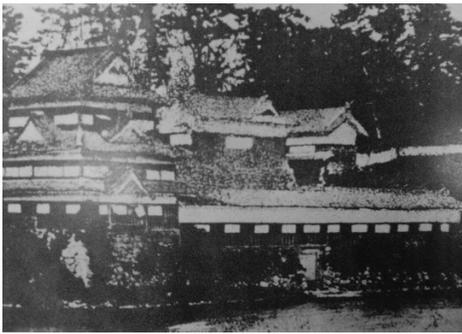


図20 吉田城の本丸(左)と大手門(右)



図21 吉田城跡の豊橋18連隊(左)と正門(右)

6. 18 連隊の設置と町の変化

明治政府は最初に各地に軍事の拠点を作ります。仙台や東京、名古屋や大阪、広島、熊本など。それぞれが分営、支店、支所というか、そういうのを作ります。これが仙台とその分営。名古屋が 18 連隊という分営を豊橋にもってきたということでもあります。こちらは

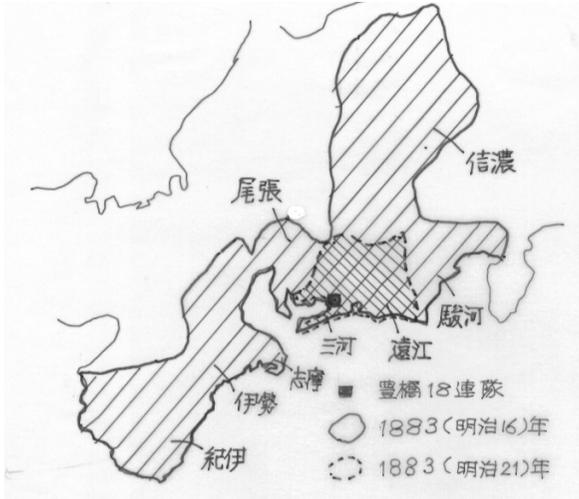


図22 豊橋18連隊徴募区域とその変化

日露戦争時代に豊橋の 18 連隊が兵隊を募集した範囲で、最初はもの凄く広がった (図 22)。紀伊半島から長野県、駿河まで。伊豆は入っていません。それが明治 16 (1883) 年の最初の頃です。5 年後になりますと、この募集地域は非常にローカルになります。これはおそらくあちこちにも同じようなのができたため、その中で少し分割をしていったように思われます。一方、これは出兵先で、日清戦争になりますと、こんな感じで遼東半島の戦いに参加しています (図 23)。右側は日露戦争の出征先ですね。遼東半島はこの

部分です。死者は 4 割ぐらい。激戦だったわけですね。大変な経験を 18 連隊の兵士たちはしました。歩兵として最前線で戦いますから死者も多かったのです。特に日露戦争の際、この遼東半島では激戦がありました。結果として、18 連隊は勝利したのですが。

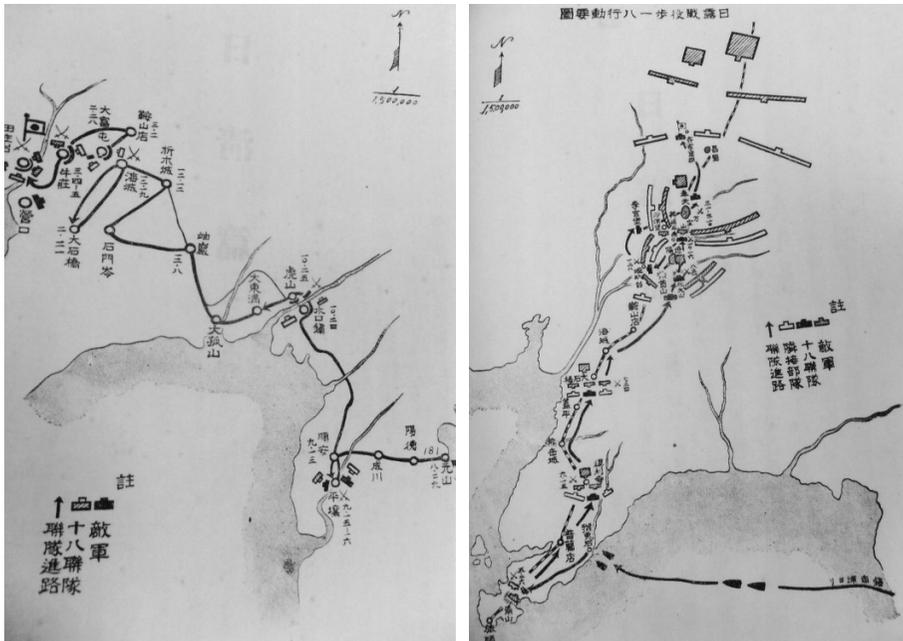


図23 18連隊の日清戦争(左)の出征先と日露戦争への出征先(右)

また、地図作りで実測地図を作った方がおられて、これが明治初期の豊橋の町の当時の実像を伝えてくれました(図24)。吉田城東方側の旧武家屋敷を練兵場に変えたことがよくわかりますね。この中央が町の中心です。東から東海道が入ってくるとこの鍵状の道路に江戸時代同様の関所があって、ここからこういうふうには札木のほうへ入って行って、関屋を一旦通って船町へ、そして豊橋(とよばし)を渡って下地のほうへいくのです。そういう状態でやはり道路沿いに市街地は集まっている。つまり、東海道沿いに集まっていた。当時の人口は、明治の最初で約1万人です。18連隊が入って来て、毎年約千人入って来るんですね。だいたい1割前後ぐらいが軍人という町になります。そしてこの千人ぐらいの人たちもやっぱり消費活動をします。それが町の中にいろいろな影響を与えています。とにかく18連隊が入って来た頃の人口1万4千9百。終戦後の昭和25(1950)年、国勢調査があった時の豊橋の人口は14万でした。だから当時はその10分の1ぐらいの規模だったのです。



図24 明治中・後期の豊橋町地図。左下に豊橋駅がオープン

豊橋の重要物産はお米とか生糸。これがみやげ物です。名物は今も同じでゆたかおこしですね。それからちくわ、かまぼこ、納豆、あとコノワタですね。軍が駐留するようになって、早くも劇場が作られています。東雲座とか寄席とか映画館、最盛期は10館を超えました。こういう娯楽施設もやっぱり軍が来て立地集積したということが分かります(図25)。これが市になった時の領域ですね。少し周辺を合併し、高師も入っています。東海道線がここ西方の町外れへ通ったんですね。市街地はここですから町外れでないと鉄道は土地の値段が高くなりますから作れない。浜松も名古屋もそうですね。愛知大学の新しい名古屋校舎がこのたび笹島に出来ましたが、この笹島には最初、名古屋駅があったんですね。これはやっぱり笹島という笹が生えている島ですからやっぱり低湿地で駅としては最初都合が悪かったんですね。今はちょっと北のほうの現在位置へ移った。だから愛大の名古屋校

舎も地盤は大丈夫かということになるわけですが、今は地下にいろんな注入剤を入れて基盤をしっかりさせています。

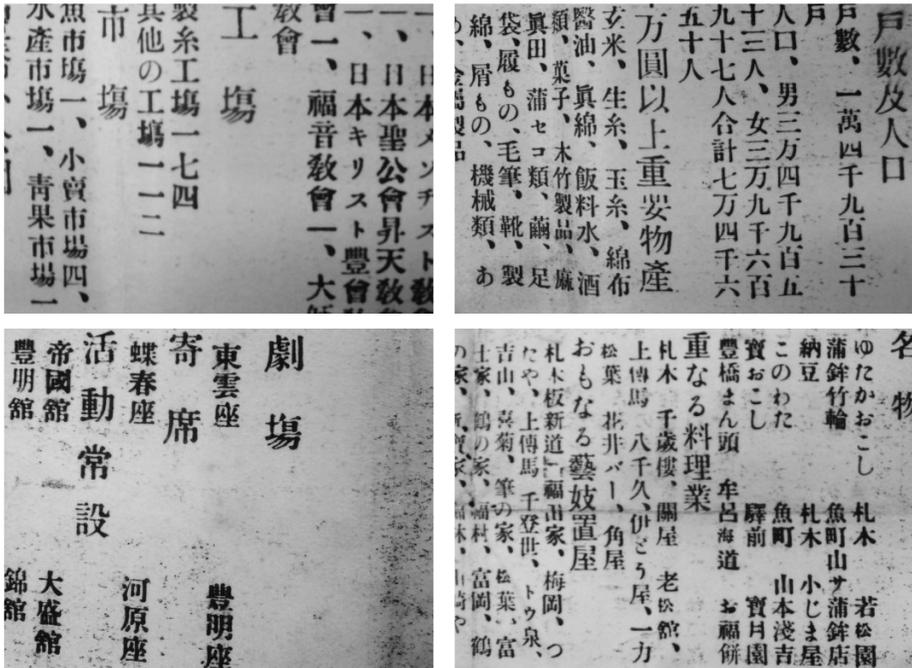


図25 第15師団時代の豊橋情報

豊橋駅が明治 21 (1888) 年にできます。東海道線の開通ですね。豊橋駅が出来た時も人口わずか 1 万人ぐらいなんです。1 万人弱の町でしたから、やっぱり 18 連隊の存在が大きかったんですね。これが先ほどの江戸時代からの伝統の上传馬の町の様子ですね (図 26)。第 15 師団が入って来るまではここが一番の繁華街と言いますか、娯楽の中心地でもありました。町の中は少しずつ洋風の建物も出てきますし、町の看板は皆右から読みですね。伝統的な筆とか炭屋さん、雑貨屋さん、今でいうとコンビニですかね。こういう商店街が競い合うようになりました。人口は 1 万ちょっとでした。当時の名古屋が 3 万ちょっとぐらいで、金沢が 5 万人でしたから、名古屋の町もそんなに大きくはなかったんです。宮の渡しがあった熱田のほうと繋がりを含めて人口 5 万ぐらいという時代でした。

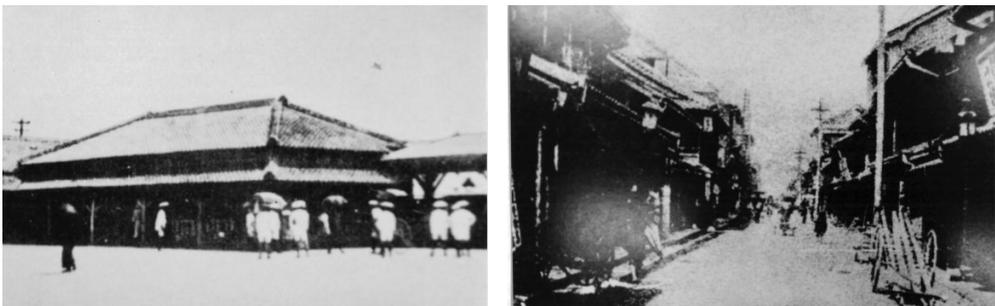


図26 東海道線開通時の豊橋駅(左)と中心地の上传馬町(右)

7. 第15師団の立地とその後の町の近代化の諸相

(1) 第15師団の建設

それで、いよいよ第15師団が入って来るのですが、それまでの間にいろいろと町の変化がありました。それは少し後のほうにお話することになります。東京を第1師団にして、全国津々浦々このように師団が配置されました。この図では第18師団まで、つまり日露戦争後の新設3師団というところまでを示してあります(図27)。第19師団になると、朝鮮に配置されることとなります。あるいは満州各地への配置だとか、もう1回同じ町に複数の師団ができたりするようになりました。一番北が旭川。南は熊本。こういうようなそれぞれの拠点に師団が配置されていったということです。愛知県と福岡県には師団が2つ配置されました。福岡県では小倉と久留米、愛知県では名古屋とこの豊橋がその配置都市です。



図27 第1～18師団の分布

これが第15師団の建物です。これは少し時代が経っていますけど、豊橋市街図です。これが田原街道ですね。ここが今の愛大。こっちが時習館高校ですね。愛大側に師団司令部がありました。それがここですね。野砲とか、騎兵とか、いろんな隊が最初に申しあげましたワンセットで配置されています(図28)。ここは今、愛知大学ですけど、当時は色々区画されているような隊が入ってきます。ここが訓練所。市内のあちこちにも訓練所ができています。こんなかたちで高師、天伯も合わせますと、約100万坪の非常に広大な軍用地を確保していったんですね。もちろんそれに対して地主の人たちが全て賛成したわけではなく、ずいぶんと細かく軍隊側と折衝するというやり取りもあったんですね。例えば農家の畑へ砲弾が飛んできたりするんですね。そのために補償請求するとか、色んな問題がある。特にこの辺の土地の買収に関しては渥美半島の表浜の人たちもけっこう土地を所有していたので、そういう人たちとの折衝は少し時間がかかりました。しかし決まったらあつという間に、1年もかからず施設ができてしまいました。大林組とか、名古屋の藤田組とか、栗田組とか、豊橋中の大工さんたちや、宮大工の人たちも召集されました。この師団司令部棟は豊橋で最初の洋風建築です。しかもこれ通し柱がありません。2階建てですけど、1階を作ってその上に乗せている。こういうのを神楽造りというんですね。東南海地震、三河

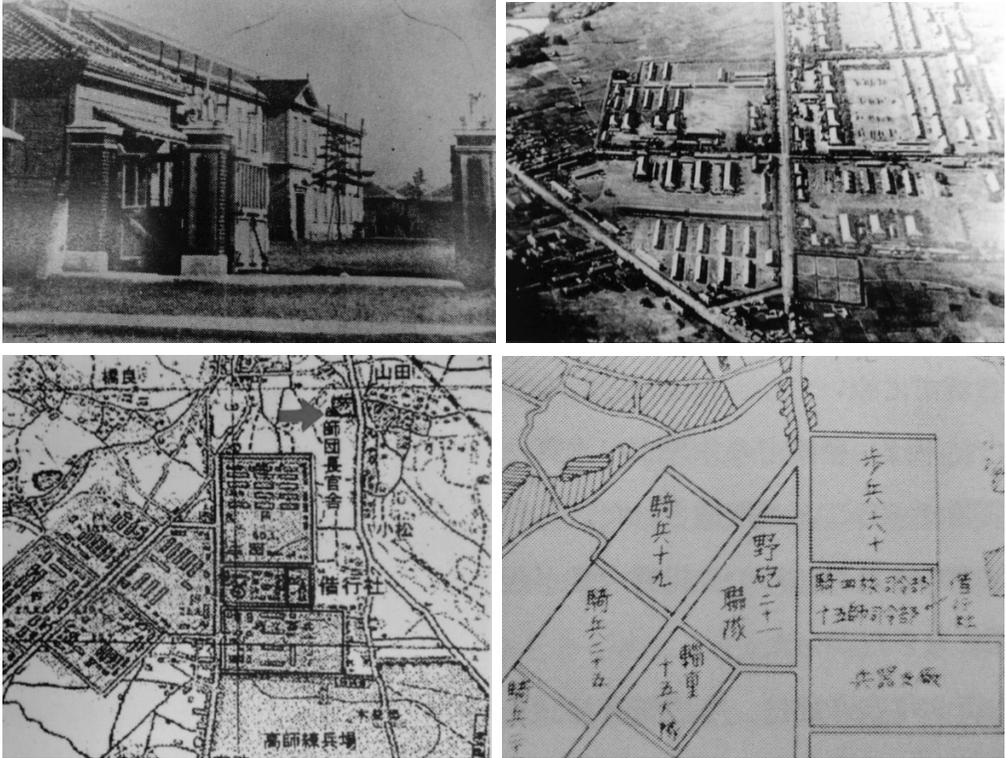


図28 第15師団の中枢部。左上が司令部棟

地震、伊勢湾台風などに強かったんです。そういう点では当時の豊橋の宮大工や大工の人たちの職人技というのは生かされていました。これがその後の市内の洋風建築、例えば、公会堂であるとか、ハリストス正教会とか、額田ビルとか、このビルは豊橋初のエレベーターを付けたりしていますね。そういう点で師団の建築物は豊橋の新しい近代化路線のベースをトレーニングさせたと言えると思います。軍事的な施設だけではなくてそのような幅広い技術的なトレーニングセンターでもありました。

師団長の官舎は、キャンパスからちょっと北へ外れています。ちょうど高師の台地の端のところ。新幹線沿いで、豊橋駅から東京へ向かうとき、出発してまもなく右側に愛知大学という看板がみえます。あれは愛知大学の先生用の宿舎なんですね。そのすぐ左、もうちょっと目を凝らしてもらおうと、それらしい木造洋風建物が見えます。それが官舎です。豊橋の市内とこの辺に軍隊組織の拠点が出来上がって、あとはすぐ南側に広がる演習場で、渥美半島に至る範囲です。農家はこういう谷間のところにありますから、それを取り囲むようなかたちで広大な演習場ができています。ずっと後には伊良湖岬のほうにも伊良湖水道沿いに試砲場ができて、伊良湖の集落が移転させられてしまうほどでした。

(2) 第15師団廃止と町の対応

この第15師団が先ほど言いましたように廃止になるわけですが、その数年後、豊橋市民も名古屋から連隊をもう一度持ってきたらどうか、工場が誘致できないとか、いろんな提案をしたりと、当時の市長さんも大変だったんですね。最初の頃は大口喜六（のち代議士）という方で、多方面に活躍して豊橋の名前と歴史を残していった市長です。そ

ういう中で軍隊の近代化が必要だというわけで、今とは大分違いますけど、そういう先端の技術をマスターすべきだということで教導学校というのがその跡地にできるわけです。学生の数で言うと2千5、6百人ですから、1万人規模とは違います。その志願者はどこから来たかというのをこの図で示しました(図29)。これは昭和3(1928)年の最初の入学生。全部で4中隊あるんですけど、2中隊だけピックアップして出身地マップを作りました。愛知県、静岡県、京都、福岡、仙台、新潟と、何か特徴があるんですね。こうやって図を作って初めて分かりました。まだ検討できておりませんが、第1、第3、第4中隊がおりますけど、こういう図は簡単にできません。ただ作ればまたそこで何か傾向が出てくるかもしれません。しかし、その出身地の住所を見てると、隣村とか、同じ村の出身が多いです。だから、連れもって入学したようです。ちょうど戦後の高度経済成長期にトヨタ自動車へ冬の農閑期に出稼ぎに来る人は青森県の弘前地方の何とか村の大字何とかって所の人が大量にやってくるのと同じかなという気がします。それで、特定の場所に集中するという傾向があるかもしれません。



図29 豊橋陸軍教導学校。昭和3年第1期第2中隊出身地学生出身地の分布(175名)

(3) 生糸の町

豊橋は同時に生糸の町として、工業都市でもありました。女工さんたちはやっぱり男性よりも多いですね。この図は大体豊橋を中心に大きな製糸工場の従業員の人がどこから来たのかというのを私が計算して作りました。大体遠州、それから渥美半島、この辺のところから来ておりますね。工場によっては伊那のほうからも来ていますから。かなり広い範囲から多くの女工さんを集めて製糸業を成り立たせていたのです(図30)。このように、軍都であるけれど、一方では生糸の町でもあり、併存しているんですね。先走って話しますと、昭和に入って不況になると、生糸も非常に苦しむわけです。そういう時に生糸業者の人たちは、生糸になる前の繭の品質をきちんと評価して価格面で差別化を図りたいと主張したのです。そこで一生懸命国に働きかけて、豊橋に最初の乾繭取引所が作られました。これは昭和の10年代です。戦後はしばらく続きましたが、生糸が化繊に押されてだめになってしまいました。しかし市の歴史的遺産として乾繭取引所ぐらいは残しておけばよかったと思うんですけど、これも戦後の高度経済成長期後に潰されてしまいました。生糸

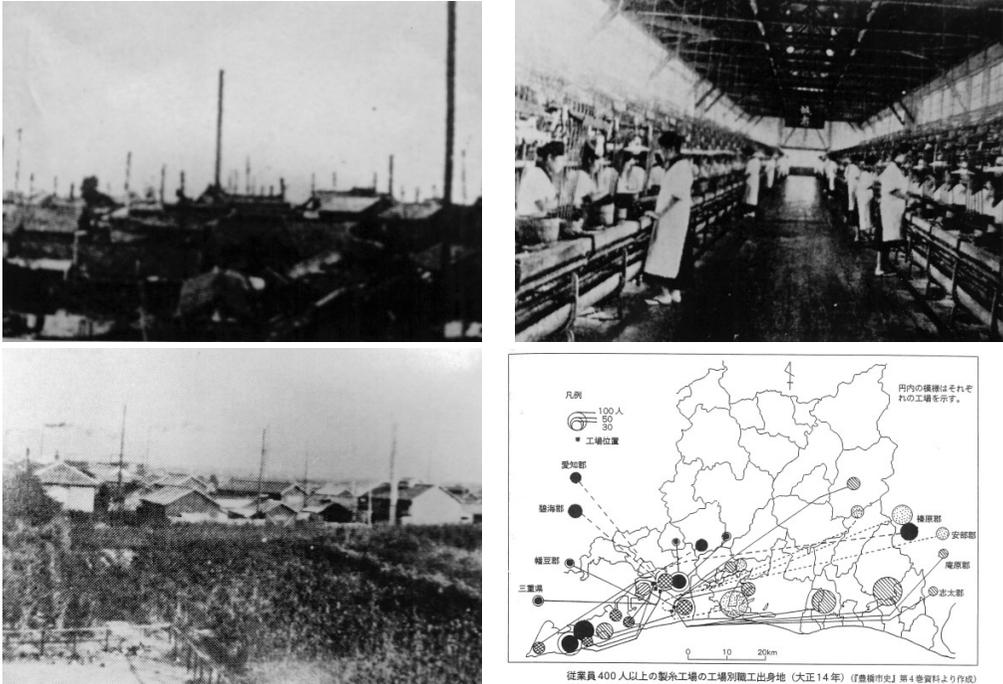


図30 市内の製糸工場地帯(左上) 大規模製糸工場の女工出身地(右下)

の大きな倉庫を持っている人もおられた。一時私もそれらの保存運動のリーダー格に推されて、豊橋の日航ホテルに 600 人ぐらいの市民の人が集まって保存のための一大講演会をやったことがあったんですけど、そこで目標を掲げた内容は市側の協力がなく、全部だめでした。非常に惜しいですね。今のように歴史的遺産が評価されるという動きはまだなかった時代ですね。そういう点では市長さんあたりは歴史的、文化的なものに対してどう評価できるかという、そういう見識もこれからは必要じゃないかなと思います。

(4) 発電、給電施設の整備と電気事業

さて次に、18 連隊が来てから電気をどうするのかという問題が起きます。そこで、最初は梅田川の上流の細谷の谷ですね。あそこで農業用水を止めて電気を発電するわけです。18 連隊まで持って来るわけですけど。やっぱり当時としては距離が長すぎて、現場では発電があるんだけど、町まで届きませんでした。しかし、当時の距離というのは、日本の中で言うと、細谷からですが、一番距離が長かったんです。長距離電線だったんです。いくら高圧をかけてもだめだったんです。次に思いついたのが牟呂用水です。火力発電と一緒に発電をしたらどうかと。これは成功しました。これが豊橋で最初の発電で、18 連隊用だったのです。軍隊と繋がっているのですね。余った電気は市内へ回し、一般に使われました。こちらは作手村(現 新城市)の見代、見るという字と代数の代ですね。この見代というところに作られた発電所です。これは 350kw です。これはずっとこの奥のほうへ、2.5 キロぐらいの水路を作り、この上のほうの斜面に大きな貯水池を作ってそこから一気に落とす。これは戦後もずっと発電していました。タービンが 2 つありました(図 31)。私は数年前、新城市の仕事でかつて地元の人たちが各地に自前で作った発電所の調査を行

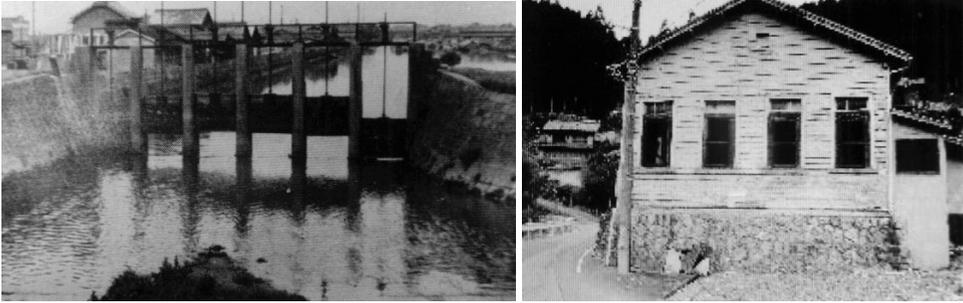


図31 牟呂用水を利用した豊橋初の発電所(左)と、作手村見代に建設された本格的発電所(右)

い、報告書をまとめたことがあります。この見代の発電所はしっかりと建物が残っている
ので、一つの奥三河発電所見学拠点として最高だから上手く活用できないかなということ
を計画しています。これもこの山の中から下地（しもじ。市内船町の対岸）まで送電をし
てきて、そこから第15師団へ給電していました。やっぱり軍隊用の発電なんですね。こう
いうわけで、軍隊と豊橋の発電史というのは切って切れない関係があったのです。そのた
めに地元の人たちが色々苦労しながら発電を実現した。豊橋の先人の人たちは大変いろん
なことにチャレンジしているんですね。

電燈数の推移をみてみますと、最初は少数でしたけど、家庭の電燈数が一気に上昇して
いくんですね（図32）。戸数もこのように増えていきますから、一戸当たり2つとか、3つ
とか付けるようになっていったんですね。ここから電力はあつという間に需要が増えて
いったということが分かります。昭和に入ると落ちてしまうんですけど、その前に大正期
というのはそういう試作の時期ですね。いろんなことを工夫してやってきた、町の近代化
の過程であったと言えます。

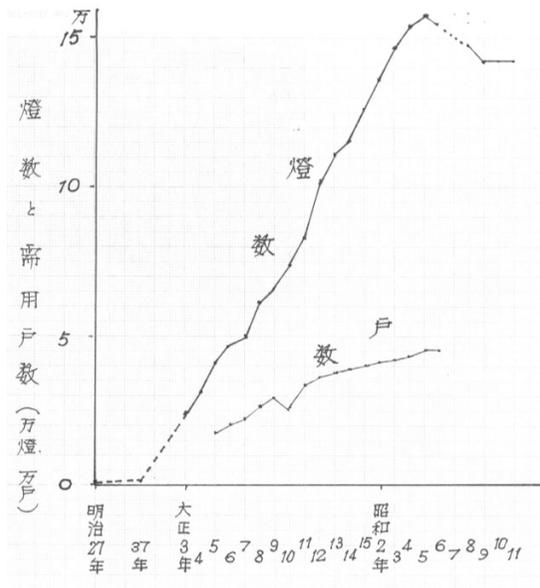


図32 豊橋市の電燈数と需要戸数の推移

(5) ガス事業の誕生

一方、これはガスです(図33)。ガスも最初は明かりとして使われますが、途中から熱として使われるようになります。ですからこの図も最初このように照明用ですけど、途中から熱としての利用となっていきます。不況になると停滞します。特徴的なのは、地元の豊橋の資本が浜松でもやろうとしたところ、浜松にはそんな風潮は一つも無かったということなんです。ガスを取り扱う受付の組織が浜松に無かったのです。そこで自由にやろうっていうわけで認めてもらって浜松へ進出することができたのです。これが今の中部ガスです。豊橋と浜松をつなげ、今、一体として連携してやっていますね。その出発点において豊橋の人の方が早く権利を得たのです。

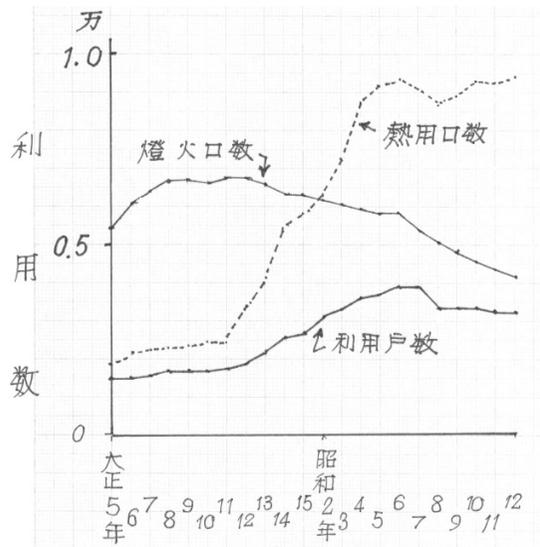
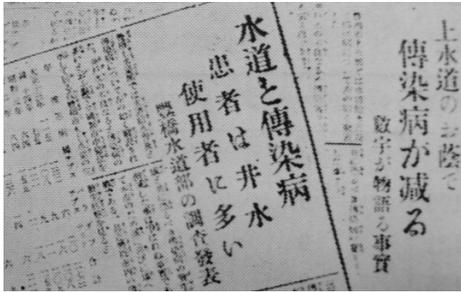


図33 豊橋市のガス利用戸数、ガス電燈数、ガス熱利用者推移

(6) 水道事業の展開

次に水道です。豊橋の水道というのはこの駅前もそうですが、町が洪積台地の上にありますから掘らなくちゃいけない。沖積低地だったらちょっと掘れば、あるいは川の水を上手く利用できますけれど、ここは掘らなくちゃいけないのです。ところが、豊橋のこの洪積台地は皆さんもご存知のようにちょっと掘ると高師小僧になったりする褐鉄鉱が含まれて赤茶けているんですね。だから水を汲み上げると赤茶けた水が出てきます。一見良さそうですが、40メートル以上も深く掘らないときれいな水が取れない。そこでいろいろ調査した結果、豊川(とよがわ)の牛川の近くの伏流水が凄く多いから伏流水を取ったらどうかということになり、豊橋の水道が始まるんですよ。ちなみに、それまでは豊橋には腸チフスとか、パラチフスとか、ジフテリアといった伝染病が非常に多く、名古屋との比率で言うとその2倍だったんですね(図34)。ところが、水道を整備したら途端に数が減少したんです。ですからそれまで汚れた水で生活を送っていたという様子が分かるんです。ここは非常に重要ですね。これは市内の繁華街で水道管工事をしている様子です。水道管がこんなかたちで次第に拡大していき、軍隊の第15師団あたりも最初整備されていました。そういうのがモデルになって広がっていったんですね。



年 度	赤痢	腸チフス	パラチフス	ジフテリア	合 計	死 亡
大 13	115	132	6	20	273	106
14	75	108	9	16	208	59
昭 元	64	121	9	11	205	42
2	84	155	2	18	259	60
3 自 1 月 至 7 月	18	136	14	6	174	0

年 度	赤痢	腸チフス	パラチフス	ジフテリア	合 計	死 亡
昭 5 自 1 月 至 7 月	25	66	0	6	97	0

図34 水道と伝染病の関係データ

(7) 下水施設整備の展開

今度は下水です。下水もそうです。第15師団でも豊橋の愛知大学のキャンパス辺りは北側の柳生川のほうへ流す。

一方で南の小学校とかは南側の梅田川のほうへ流す、というような仕組みができていたんですね。そこで、これに合わせて同時に下水道工事も行います。昭和の10年代ぐらいが最盛期になります(図35)。しかし、後半になると日中戦争が始まり、太平洋戦争が始まると、管の部品がもう揃わなくなり、途中でストップしてしまうんですね。それでも広い範囲をカバーできるようになり、戦後豊橋が更に拡大していくときにはそれを延ばすだけでよく、そのようにして豊橋の下水道普及率は全国でもトップクラスになったのです。

昭和年度	12	13	14
八町排水区	193	147	176
船町排水区	20	19	19
北島排水区	8	8	8
東田排水区	29	27	29



図35 下水道の普及と普及区域の拡大

(8) 鉄道交通網の整備と大都市圏構想

今度は鉄道です。豊橋駅が明治21(1888)年にできますけれど、昭和に入る前後ぐらいに豊川鉄道が開通します。私鉄としては豊川鉄道が全国で一番古いんです。そういうことも知ってもらいたいですね。豊川鉄道。これが鳳来寺鉄道と繋がって、三信鉄道として伊那谷までつながります。しかし、昭和18(1943)年には国鉄に買収されて飯田線となります。これが豊川鉄道と愛知電鉄の吉田駅です。子どもの頃、5、6歳まで豊橋にいたんですけど、戦争で上から焼夷弾が落ちて天井がみんな抜けでヨーロッパの戦後の廃墟の町みたいに筒状に壁だけが残っていました。これはそんな豊橋駅。戦前は駅が整備されています。これは豊川鉄道も豊橋駅へ入ってきてターミナル駅となります。豊川鉄道はさらに豊川駅にデパートから映画館までそろえて画期的な一大ターミナルセンターになりました。これは日本の戦後の駅ターミナルに色んな商業施設の併設がみられましたが、その先駆けとなったのが豊川鉄道だったのです。沿線には大遊園地を作るなど、そういう点では非常

に先駆的で意欲的でした。しかし、国鉄になってからせつかくの意欲も絶たれてしまったんですね。

ところで、豊橋駅前が狭かったんですが、第15師団が入ってからは拡大していきました。戦争中になりますと、この辺りは全部強制疎開、建物が壊されて今の駅前広場が広がっていくんですね。西駅のほうは製糸工場が中心になって皆集まってきたんですね。

市内電車も開通時期が早いんですね。大正期に開通します。路線網をみると、豊橋駅から広小路を通って神明町のところで左折し、大手門へ行きます。そこから右折して東田の方へ伸びています。第15師団時代になってそれまでの花街が札木とか上傳馬から東田へ一括移されたためです。この広小路通りに豊橋丸物がオープンしました。昭和8(1933)年以降ですね。広小路通りはこんな狭かったわけですけど、こういうなかたちで市内電車が通ったのです(図36)。しかし、不況期にはちょっと減ります。やがてバスも台頭してきて波はありますけれど、電車が市民の足になっていた様子がよく分かります(図37)。

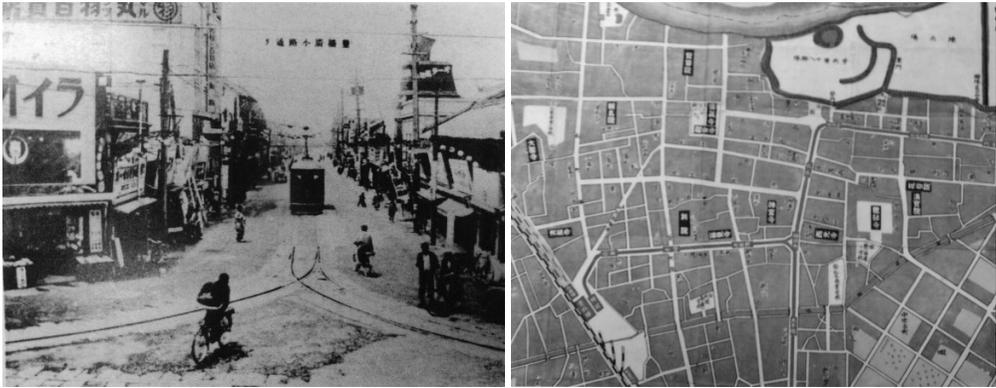


図36 広小路を通る市内電車、左側に丸物百貨店がみえる。(左)。市電路線図(右)

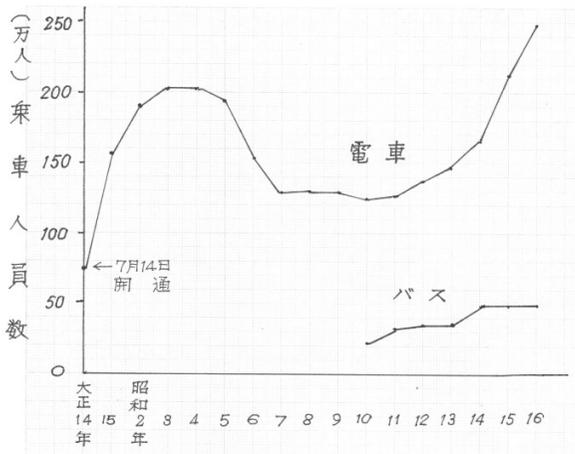


図37 市内電車とバスの乗車人員数の変化

その後になりますと、豊橋も少しずつ自信を持って、豊橋に港を作るというプランも出来上がり、色んな交通網が豊橋に集まってきます。渥美線も最初は渥美電鉄と言いました。渥美線は田原のもう一つ向こうの伊良湖へ繋がっていく。そして、彼らが考えたのはもっと凄く、なんと伊勢へと繋がっていくのです。さらに豊川鉄道も含めて北方は善光寺まで繋ぐ。つまり、善光寺から伊勢神宮線、大きな構想ですね。今日の三遠南信地域さえ貫いてもっと拡大して計画している。そういう点

でいうと、今の豊橋のプランというのはきわめて小さいという感じがします。当時はそのぐらいの意気込みでプランを作っていたことはもっと知られていいですね。ところが日中

戦争が始まってしまい、資金が続かなくなってしまいました。ただ最初の構想はこのように非常に素晴らしかったんですね。

(9) 商業発展と大豊橋都市計画

豊橋の人口も14万人まで達し、戦後の昭和25(1950)年と同じレベルまで達しました。ほぼ浜松と同じです。町の中心地機能も高まります。商品陳列館。公会堂、駅、広小路が新たな商業地に加わり、ここには丸物も立地、ほかに旭デパートとか松葉デパートとか、豊橋に3つデパートができました(図38)。競争も激化します。通信販売、訪問販売もさかんになり、中小企業の商店としてはこれではお手上げだなというわけで排斥運動をやるんです。戦後、スーパーが豊橋駅前にどんでんきたときに、広小路の人たちも含めて商店主側は反対と言って、結局大店法で外へ追い出してしまいました。それを戦前のこの時代ですでにやっていたんです。丸物も物産館を買い取った後、結局は時代の流れの中で、最初は物産館が集めて売っていた品物だけを売ってよらしいということになり、時代の変化の中で百貨店として商売するようになります。だからこのデパートがこのようにできますと、豊橋市側も公設のスーパーマーケットをあちこちに建てて対抗します。民間の人に市場を任せたり、市の農業市場については、農協が道の駅とか、農協のスーパー

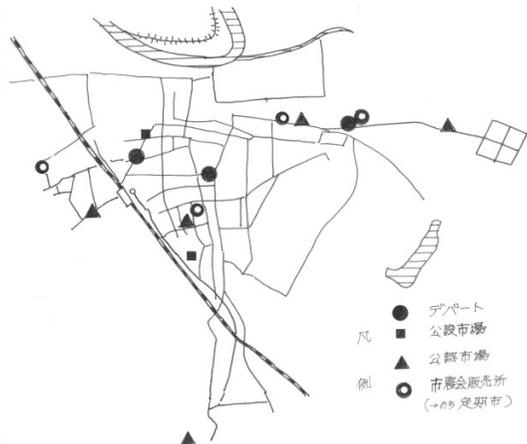


図38 昭和恐慌期における商業戦略

とか、そういうものをあちこちに作って外来資本と対抗しています。戦前のこの時代ですでに戦後の「豊橋戦争」と言われた商店競争があったんですね。非常に参考になります。

これはその当時の電車が通った市内の様子です。第15師団は道路を良くすることを注文してきました。そこで豊橋市は大豊橋計画というのを作ります。その時にちょうど国のほうも都市計画のための助成をしましょうという法案が通り、全国20都市ぐらいが立候補しました。豊橋も駆け込みでやったんですけど落選してしまったのです。そこで残念だと、これだけやっているのだからというわけで、当時の市長が繰り返し交渉に行き、4都市が復活されるんです。豊橋も入っています。そこでこのようにプランを立てました(図39)。ご覧になって分かるのは、あれ、今と同じじゃないかっていうことですね。国道1号線、この大橋を通過して豊橋駅前と駅前大通り建築計画案はもう出来ていますね。

広小路とこれ駅前大通り、何のことはない、戦後焼け後の豊橋の復興計画はこれと全く同じですね。この計画は大正期中期にできた。豊橋において戦後都市計画がスムーズにいったのは、この大都市計画のおかげだと言えらるかと思います。その前にこれは人毛の工場を誘致する案が出された時があり、市民が賛成、反対で2分され、紛糾した事がありました。この工場誘致を豊川の河口の漁民の人たちが猛反対しまして、市がほぼそれを誘致承認する直前にひっくり返したのです。とくに六条潟が荒らされ、さらに広く環境が破壊されるというような漁民からの猛烈な反発があったというわけです。初の環境問題のクローズアップでした。



図39 大正期に立案された豊橋都市計画図

(10) 空襲による都市構造の変化

しかし、空襲で駅前から市街地の 8 割ぐらいが焼けてしまいました。そんな中で、戦後は渥美半島の高師、天伯などの大演習地は開拓地へ転換しました。被災者やダム建設による水没者の人たちが、例えば富山村で水没した人たち、佐久間ダムによるものですね。こういう人たちが入って来て新しく農場を拓きます。しかしここは石灰を撒かないとなかなか中性化できない土壌です。これは安城の「日本のデンマーク」と呼ばれた開拓地も同じでした。そう簡単には農業はできなかった。農業をやる人たちも大変な苦労の中で中和作業が進んで道が拓けていった。しかしようやく農業として確立できるという時に、高師あたりまで豊橋の都市化の波で住宅建設が押し寄せてきて、せっかく農地ができたのに住宅地になってしまうのです。天伯のほうはまだ農業ができるということですね。色々な施設ができますけど軍用地の跡が使われています。戦後の豊橋の都市計画図がでてきますが、何のことはない。もう一度言いますと、先ほどの大正中期の頃の大都市計画と同じです。これは東三河の環状線。あの時説明しませんでしたけど。これもちゃんとプランに入っています。戦前は、札木、上传馬の地価が一番高くそこが中心地だったんですね。花園とか駅前も高くなりますけれど、戦後はすっかり駅前中心へと都市構造が変わってしまいました。あまりに駅前中心で奥行が無くなってしまったということもあります。

最後に男女別人口について話します。明治 39 (1906) 年の市制を敷いてからの人口推移をずっとみていきますと、第 15 師団ができてから増えていきますが、どの年も女性のほうが多いです (図 40)。これもやっぱり製糸工場のせい。軍隊が入ってきたとしても製糸工場は製糸工場でしたからね。時間がないので人口と戸数だけをみていきます。これ少し人

口が増えますけどね。やっぱり底上げをしている。また合併効果ですね。最後に豊橋、岡崎、浜松を比較しますと、黒い丸印が豊橋です。それぞれに競争しながら切磋琢磨している（図 41）。岡崎のいい点、豊橋のいい点、浜松のいい点などお互いに学び合いながら、こういう経過をたどってきたということが非常によく分かります。

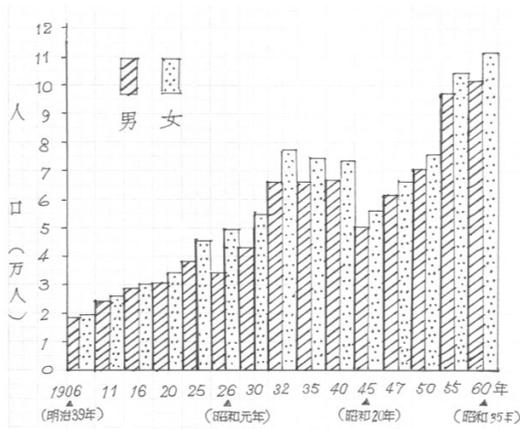


図40 豊橋市の年別男女別人口の推移

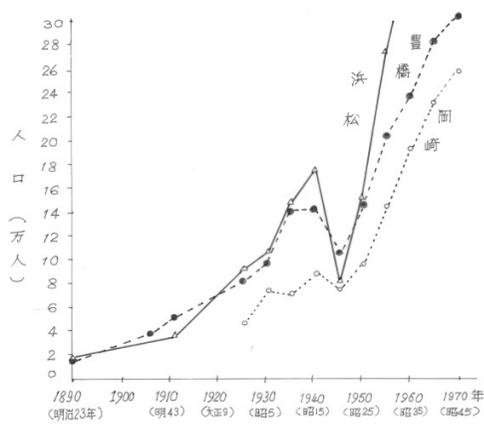


図41 豊橋、浜松、岡崎の人口変化

8. おわりに

これで、終わりに致します。今までお話したそれぞれ個別の内容の中で戦前までの豊橋の人たちがいかに町づくりに一生懸命であったか。かなり大きなプランを持ちながら町をどういうふうにして、活性化できるかという工夫をしてきたことがわかります。このきっかけが軍隊であったといえます。軍隊、それは今の時代で言うとトヨタ自動車 came 来たようなものでしょう。しかし、人の動きをみると軍隊が戦場へ行くと町の人が減ってしまう。そのような変化も経験しています。変化の中で豊橋の町は揺れながらもぎやかに発展してきました。現在はそういう点で言うと、戦後は大きな変化がありましたけど、現在はあまり動きの無い時代に入り、安定期を迎えたということでもあります。こういう時こそもう一度、戦前の人たちの知恵を学び、今我々が何をすべきかといったような構想を検討する、一つのきっかけになっていただければと思います。

私の説明はこれで終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

【注】本稿は講演録なので、注を付記することができなかったが、本文中の図・表・写真は講演者の作成によるもののほか、次の文献等から引用させていただいた。『豊橋商工会議所百年史』（昭和 59 年）、『豊橋市政五十年史』（昭和 31 年）、『豊橋市史五十年史』（昭和 62 年）、『豊橋市水道誌』（昭和 5 年）、『豊橋市水道五十年史』（昭和 55 年）、『豊橋市下水道誌』（昭和 11 年）ほか。